

令和元年度 厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）
種々の症状を呈する難治性疾患における中枢神経感作の役割の解明と
それによる患者ケアの向上
分担研究報告書

慢性疼痛の心療内科外来治療への愛着スタイルの影響

研究分担者 細井 昌子
九州大学病院 心療内科 診療准教授（講師）
同病院 集学的痛みセンター 副センター長

研究要旨

我々は九州大学病院心療内科の慢性疼痛臨床において、幼少期からの生育歴に関連した対人不信が脳機能の変化をもたらし、中枢神経感作として痛覚過敏が生じ、治療予後に関連することを観察してきた。また、難治性の慢性疼痛患者の背景として、不安定な愛着スタイルの関与が先行研究で示唆されているが、愛着スタイルが治療の反応性に影響するかについては十分には検討されていない。今回我々は、愛着スタイルが心療内科外来治療の反応性と関連するか検討した。九州大学病院心療内科の外来を継続受診した線維筋痛症以外の慢性疼痛患者 63 名を対象とした。初診時に、痛みの強さ(Visual Analogue Scale: 痛み VAS)、痛みによる生活機能障害(Pain Disability Assessment Scale: PDAS)、愛着スタイル(Relationship Questionnaire: RQ)を自記式質問紙により測定した。VAS と PDAS は 6 か月後にも測定した。RQ に基づく 4 つの愛着スタイル（安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型）別に、VAS と PDAS の治療前後での改善を評価した。

各愛着スタイルは、安定型 18 名(28.6%)、拒絶型 9 名(14.3%)、とらわれ型 8 名(28.6%)、恐れ型 18 名(28.6%)であった。VAS については安定型と拒絶型においてのみ有意に改善を認めた ($P < 0.05$)。PDAS についてはいずれの愛着スタイルにおいても改善は有意ではなかった。

有意な疼痛強度の改善がみられた安定型と拒絶型の愛着スタイルは、いずれも自己観が肯定的な愛着スタイルであった。自己観が否定的な場合は「ありのままでは自分は受け入れてもらえない」と人の役に立つことを最優先し、自身の心身の状態に合致した休養がとれずに慢性疼痛が難治化する可能性がある。

A．研究目的

幼少期からの生育歴は、他者との交流の原点になり、その後の人生に影響を与えるが、その心理社会的因子として、近年愛着様式が注目されている。愛着行動とは、乳幼児が危険や不安を感じる状況に置かれた際、特定の養育者（通常母親）に接近することで、安全感を感じたり、不安を軽減したりする行動のことである。健全な成長とともに愛着の対象が広がり、「世の中の人には自分を助けてくれる存在」という基本的信頼感、「自分は受け入れてもらえる存在」という自己肯定感が育まれる。幼少期に形成された愛着スタイルは生涯通じて維持され、対人関係や問題解決・ストレス対処能力に影響し続ける。

一方、難治性の慢性疼痛患者の背景として、不安定な愛着スタイルの関与が先行研究で示唆されている。九州大学病院の心療内科にお

ける慢性疼痛難治例の臨床でも、幼少期からの生育歴に関連した対人不信が脳機能の変化をもたらし、中枢神経感作として痛覚過敏が生じ、治療予後に関連することを観察してきた。とくに、これまでの我々の研究で、線維筋痛症患者において、自他否定の愛着スタイルが関与していることを報告したが、線維筋痛症以外の慢性疼痛において、愛着スタイルが治療の反応性に影響するかについては、まだ十分には検討されていない。

そこで、線維筋痛症以外の診断を受けた慢性疼痛難治例の愛着スタイルが、心療内科外来治療への反応性と関連するか検討した。

B．研究方法

九州大学病院心療内科の外来を継続受診した線維筋痛症以外の慢性疼痛患者 63 名を対象とした。初診時に、痛みの強さ(Visual

Analogue Scale: 痛み VAS)、痛みによる生活機能障害 (Pain Disability Assessment Scale: PDAS)、愛着スタイル(Relationship Questionnaire: RQ)を自記式質問紙により測定した。VASとPDASは6か月後にも測定した。RQに基づく4つの愛着スタイル(安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型)別に、VASとPDASの治療前後での改善を評価した。対象者には研究の説明を文書で行い、文書で同意を得た。

C．研究結果

各愛着スタイルは、安定型 18 名(28.6%)、拒絶型 9 名(14.3%)、とらわれ型 8 名(28.6%)、恐れ型 18 名(28.6%)であった。VAS については安定型と拒絶型においてのみ、初診から 6 か月後に有意に改善を認めた ($P < 0.05$) (図 1)。PDAS についてはいずれの愛着スタイルにおいても改善は有意ではなかった(図 2)。

D．考察

自己観が肯定的な安定型と拒絶型の愛着スタイルの症例で傾聴を中心とした 6 ヶ月間(約 2 回の介入)の心身医学的治療で疼痛強度の有意な改善がみられた。自己観が肯定的である場合、痛みの背景の環境や悩みについて、医療者に率直に自己開示することができるため医療者が患者の身体・心理的状态を把握しやすいために改善しやすい可能性がある。

他者観が肯定的ではない拒絶型は、治療者に対しても防衛的/懐疑的であることも多いが、良好な医師-患者関係を築くことができれば、安定型と同様、提案された治療に主体的に取り組むために、自他否定型の恐れ型よりも改善しやすいのかもしれない。

E．結論

心療内科外来で線維筋痛症以外の診断を受けた難治性慢性疼痛患者に対する傾聴を中心とした初期の心身医学的治療において、自己観が肯定的な愛着スタイルである安定型と拒絶型で有意な痛み強度の改善を認めた。

F．健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載。

G．研究発表

1. 論文発表

1) 濱上陽平、木村慎二、大鶴直史、安野広

三、細井昌子・運動療法と認知行動療法の併用効果 ―いきいきリハビリノートを用いた認知行動療法に基づく運動促進法―(特集/運動器慢性疼痛マネジメントにおけるリハビリテーション診療の意義と重要性)・MB Med Reha(全日本病院出版会) NO.242・45-51・2019

- 2) 深町享子、一之瀬喜美子、太田衣美、菊武恵子、安野広三、富岡光直、須藤信行、細井昌子・看護師の交流分析に関する意識と慢性疼痛患者に対するストレス認知との関連・慢性疼痛 38(1)・134-139・2019
- 3) 田中佑、安野広三、早木千絵、西原智恵、柴田舞欧、岩城理恵、須藤信行、細井昌子・慢性疼痛患者への心身医学的介入の効果：初診時における「過去の医療不信」が痛みの破局化の改善に関連する・慢性疼痛 38(1)・104-110・2019
- 4) 富岡光直、細井昌子、麻生千恵、須藤信行・自律神経訓練法を患者の病態理解に役立てる・心身医学59(8)・742-747・2019
- 5) 細井昌子・慢性疼痛に対する心理的アプローチ--嫌悪的現象との付き合い方を習得するレッスン―・医学と薬学第77(1)・47-52・2020
- 6) 田中佑、安野広三、細井昌子・慢性疼痛に対する心理的アプローチ：Bio-psycho-social model から・臨床と研究 97(2)・73-78・2020
- 7) 細井昌子、伊津野巧、茂貫尚子、末松孝文、安野広三・「こころ」の痛みと「からだ」の痛み-慢性疼痛臨床における心身相関・臨床心理学 20(2)・150-154・2020

2.学会発表

- 1) 細井昌子・慢性疼痛における心身相関：薬物療法を阻害するメカニズムの解明・第41回日本疼痛学会（セミナー）名古屋、2019.7.13
- 2) 細井昌子、柴田舞欧、安野広三・慢性疼痛の治療対象としての情動調整障害：アレキシサイミア・第41回日本生物学的精神医学会（シンポジウム）新潟、2019.6.23
- 3) 細井昌子、橋本英信、安野広三、早木千絵、西原智恵、田中 佑、須藤信行・失体感症と慢性疼痛臨床アウトカムとの関連・第2回日本心身医学関連学会合同集会（ポスター）大阪、2019.11.15
- 4) 安野広三、細井昌子、田中 佑、早木千絵、西原智恵、柴田舞欧、岩城理恵、須藤信行・慢性疼痛に対する心療内科外来治療への失感情症の影響：線維筋痛症とその他の慢性疼痛の比較・第2回日本心身医学関連学会合同集会（ポスター）大阪、2019.11.15
- 5) 足立友理、細井昌子、安野広三、平林直樹、松下智子、富岡光直、須藤信行・母親への強い怒りの処理に難渋し、非言語的アプローチが有用であった線維筋痛症の一症例・第2回日本心身医学関連学会合同集会（ポスター）大阪、2019.11.16
- 6) 田中 佑、細井昌子、安野広三、早木千絵、西原智恵、柴田舞欧、岩城理恵、須藤信行・慢性疼痛の心療内科外来治療への愛着スタイルの影響・第2回日本心身医学関連学会合同集会（ポスター）大阪、2019.11.16
- 7) 義田俊之、細井昌子、安野広三、河田 浩、早木千絵、岩城理恵、西原智恵、柴田舞欧、須藤信行・慢性疼痛患者における医療不信と破局化および不快情動との関連・第2回日本心身医学関連学会合同集会（ポスター）大阪、2019.11.17

- 8) 柴田舞欧、細井昌子、平林直樹、齊藤貴文、森崎悠紀子、安野広三、須藤信行、二宮利治・日本人地域一般住民における慢性疼痛の有症率と定義の検討：久山町研究・第59回日本心身医学会九州地方会（一般演題）福岡、2020.2.8
- 9) 大杉康司、細井 昌子、足立友里、富岡光直、田中 佑、安野広三、須藤信行・受動性への介入が奏功した脳脊髄液減少症治療後の慢性頭痛に対する段階的心身医学的治療・第59回日本心身医学会九州地方会（一般演題）福岡、2020.2.8
- 10) 富岡光直、細井昌子、森崎悠紀子、須藤信行・自律訓練中のイメージ・リハーサルが行動拡大に効果的であった線維筋痛症の一例・第59回日本心身医学会九州地方会（一般演題）福岡、2020.2.8
- 11) 柴田舞欧、齊藤貴文、須藤信行、細井昌子・日本人地域一般住民における慢性疼痛の定義と有症率の関連：久山町研究・第49回日本慢性疼痛学会（一般演題）2020.2.28
- 12) 義田俊之、安野広三、河田 浩、早木千絵、岩城理恵、西原智恵、柴田舞欧、須藤信行、細井昌子・慢性疼痛患者における感情同定困難と抑うつとの関連の背景を探索：思考コントロール方略の影響・第49回日本慢性疼痛学会（一般演題）2020.2.28
- 13) 田中佑、安野広三、早木千絵、西原智恵、柴田舞欧、岩城理恵、須藤信行、細井昌子・愛着スタイルと心療内科の外来治療に対する反応性：線維筋痛症以外の慢性疼痛患者における検討・第49回日本慢性疼痛学会（一般演題）2020.2.28

H 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1.特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3. その他

(研究協力者)

- 1) 九州大学病院 心療内科
- 2) 九州大学病院 集学的痛みセンター
- 3) 九州大学大学院医学研究院 附属総合コホートセンター
- 4) 九州大学大学院医学研究院 心身医学

田中 佑1), 安野広三1,2), 早木千絵1),
西原智恵 1), 柴田舞欧 1,3), 岩城理恵
1), 須藤信行 1,4,5)